

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 28 年 5 月 20 日現在

機関番号：84602

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2012～2015

課題番号：24520880

研究課題名(和文)古墳時代における渡来系集団の出自と役割についての考古学的研究

研究課題名(英文) Archaeological study of the origin and role of Korean immigrants in the Kofun period

研究代表者

坂 靖 (Ban, Yasushi)

奈良県立橿原考古学研究所・附属博物館・学芸課長

研究者番号：30250377

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,900,000円

研究成果の概要(和文)：奈良県内から検出された古墳時代(3～6世紀)の朝鮮半島と関わる考古資料を集成し、百済・馬韓地域、新羅・加耶地域と関連する遺構・遺物及び特定地域とは結びつけることのできない遺構・遺物に分類した。これらから、渡来系集団の足跡をたどり、それぞれが当時の生活様式・生産技術の革新に大きな役割をはたしたことを確認した。さらに、渡来系集団の出自は、政治的中心地ではなく周縁地域にあり、その技術も最先端のものではないことを明らかにし、帰属意識の明確でない自由往来の海洋民の存在が重視される点を明らかにした。

研究成果の概要(英文)：Archeological assemblages from the Korean Peninsula were detected to be Kofun period (3-6th century A.D) from the Nara prefecture. The ruins, relics and specific areas of Baekje, Mahan region and specific areas associated with the Shilla Gaya region were all found to be associated classified with these immigrants. From these, following the footsteps of Korean immigrants, respectively, it was confirmed that played a major role in the innovation of the Kofun period of life style and production of technology. In addition, the origin of the Korean immigrants located in the peripheral region, not the political center, technology also revealed that they were not state-of-the-art, the presence of the seafaring people of no clear free movement or the sense of belonging is important It revealed the point.

研究分野：考古学

キーワード：朝鮮半島 百済・馬韓地域 新羅・加耶地域 韓式系土器 遺跡学

1. 研究開始当初の背景

近年、渡来系集団に関わる資料が著しく増加し、1990年代から2000年代にかけて、その考古学的検討がさかんにおこなわれるようになってきた。そうしたなか、研究分担者の中野が2007年に近畿地方の韓式系土器の集成・分布をおこなった。また、研究代表者の坂は、鏝座金具・胡籬・小型農工具・筒形土製品などの遺物や、奈良県内の遺跡の検討を通じて、朝鮮半島系の渡来集団の意義づけをはかってきた。こうした資料を総合化し、検討を加え、渡来系集団の出自とその役割を考えようとするものである。

2. 研究の目的

本研究は、古墳時代(3~6世紀)における渡来系集団の史的意義について考古学資料を通じて究明しようとするものである。遺構・遺物を総合的に捉え、遺跡を構造的に把握する独自の「遺跡学」の視点から、資料を悉皆的に集成し、渡来系集団の出自とその役割を検討するとともに、ヤマト王権と有力豪族の膝下にあつて、生産技術の移植・生活環境の革新から古墳の造営にいたるまで、渡来系集団が与えた影響とその意義について考える。

3. 研究の方法

渡来系集団に関わる考古資料のうち、遺構としては、大壁建物、オンドル状遺構などをとりあげ、古墳に関連しては、墳丘の構築方法や埋葬施設の構造などをとりあげた。

また、遺物としては韓式系土器、土製品、鉄製品、金工品などをとりあげる。ここでいう韓式系土器とは、日本の遺跡から出土する古墳時代の軟質(土師質)、硬質・陶質(瓦質・須恵質)の土器のうち、在来の土師器の系譜にはなく、朝鮮半島に由来する特殊な器種・器形と製作技術を有するものを指す。従来は、韓式系軟質土器と陶質土器に分類されていたが、ここでは、両者を一括して扱う。器種として、甑・平底鉢・長胴甕などがあり、製作技術として格子タタキ・縄蓆文タタキ・平行タタキなどがある。明らかに搬入品と考えられるものや生産地の判別が難しいものもあるが、大多数は日本国内で製作されたものであり、器形あるいは製作技術が土師器のそれと折衷し、中間的な位置にあるものも多い。いずれも、渡来系集団の出自を探る上で重要な資料となる。

そこで、まずその出自が明確なものとして、朝鮮半島西南部の百済・馬韓地域及び同東南部の加耶・新羅地域の渡来系集団について検討し、そのうえで、特定地域と結びつけることのできない渡来系集団について検討した。

さらに、それぞれ個別の遺跡について、地域別に集落遺跡及び古墳・古墳群における渡来系集団の意義と役割について検討した。

このほか、朝鮮半島西南部の前方後円墳・埴輪と5~6世紀の渡来系集団や、羽釜・移

動式竈の受容と展開についても検討を加えた。

4. 研究成果

(1) 古墳時代の渡来系集団の出自と役割

百済・馬韓地域

ここで対象とするのは、漢江流域・錦江流域・栄山江流域など、朝鮮半島西南部地域である。三韓(原三国)時代は、広く馬韓地域にあたる。その後、百済が、漢江流域の漢城(現在のソウル)を中心に一定の支配領域を確保し、漢城期の百済が形成される。その王宮と推定されているのが、近年発掘調査が進捗している風納土城である。

日本列島と関わりが深いのが湖南地域(栄山江流域周辺)である。ここで掲げた考古資料の大半がこの地域からの影響を受けたものである。また、6世紀前半代には確実なものだけでも12基の前方後円墳が築造されている。これらが、百済王権のもとで築造されたのか、在地首長のものか、倭人が築造したのか、見解が分かれている。

百済と倭が、親縁的な外交関係にあったことは周知のことであろう。とりわけ、6世紀半ば~7世紀半ばの、仏教公伝から白村江の戦いにいたるまでの間は、政治的・文化的にもその命運をともにしたといっても過言ではない。しかしながら、3~6世紀半ばの古墳時代においては、百済の政治的及び地域的な中枢部からの渡来人及び渡来系集団の存在は明確ではない。帰属意識の明確でない海洋民や生産者集団、地域的にも外縁部にあつた人々が、日本列島に強い影響を与えたと考えられる。

百済系渡来集団の住居として注目されているのが、「大壁建物」である。

奈良県内では、御所市南郷遺跡群、高取町清水谷遺跡・観音寺遺跡・森カシ谷遺跡・薩摩遺跡・市尾遺跡・羽内遺跡、明日香村檜前遺跡群・ホラント遺跡、橿原市及び桜井市にまたがる東池尻・池之内遺跡などで5~8世紀の「大壁建物」が検出されている。

オンドル(温突)は、周知のとおり朝鮮半島通有の暖房施設である。現在ではガスを熱源とした温水床暖房施設を指してこう呼ばれているが、それが普及する以前は台所の竈の蒸気や煙を熱源としていた。奈良県内では御所市南郷遺跡群の林遺跡及び上記の大壁建物の項で述べた高取町清水谷ナルミ遺跡・観音寺遺跡・森カシ谷遺跡の事例があり、百済・馬韓系渡来人との関連で注目される。

古墳の埋葬施設としての横穴式石室のうち、奈良県においては、群集墳に採用されたもののなかで、ごく初期のもので右片袖式の平面プランをもつものは、百済・馬韓地域の渡来系集団と関連するものとされる。桜井市稲荷西古墳、平群町椿井宮山塚古墳、橿原市新沢千塚221号墳、葛城市寺口忍海D-27号墳、御所市巨勢山408号墳などがあげられる。

朝鮮半島の一般的な土器製作技術は、タタキである。格子タタキ・平行タタキ・縄蓆文タタキについては、その地域性を明確にはできないが、鳥足文タタキや、特殊な平行タタキについては、百済・馬韓地域との関連で捉えられることが多い。奈良県内では、鳥足文タタキを施した土器が出土した遺跡として天理市布留遺跡・星塚1号墳・桜井市赤尾崩谷1号墳、御所市南郷遺跡群の事例がある。また、特殊な平行タタキを施したものとして、田原本町唐古・鍵遺跡例があり、この資料は栄山江流域との関連が指摘されている。

このほか、百済・馬韓系土器の器種として両耳付壺・蓋、坏蓋、平底壺(瓶)、平底広口壺(広口短頸壺)、短頸壺(盒)、甕(壺)、長胴甕(長卵形土器)、甑、椀(盤)、平底鉢(深鉢)、鍋などが奈良県内の62遺跡から出土している(図)。また、土製竈焚口枠・筒形土製品も百済・馬韓系の土製品である。こうした、土器・土製品から百済・馬韓地域を出自とする渡来系集団の足跡を追うことが可能である。

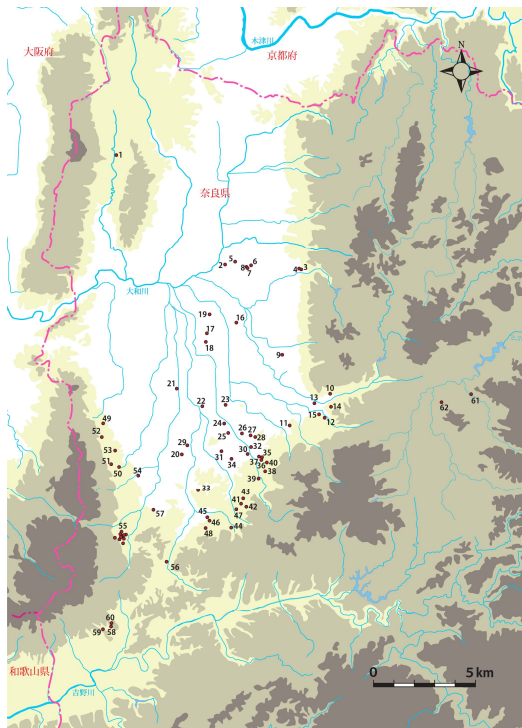


図 百済・馬韓系土器の出土遺跡の分布

金工品においても、星塚2号墳の金製垂飾付耳飾が百済・馬韓系渡来系集団と関連するものとして意義づけられる。

新羅・加耶地域

朝鮮半島の東南端部は、加耶にあたり、小国が分立していた。洛東江河口部の金海・釜山周辺は、「狗邪韓国」・「金官」で、良洞里遺跡や大成洞古墳群・福泉洞古墳群がそれにかかわる遺跡として意義づけられている。その上流の高霊周辺が「大加耶」で、池山洞古墳群がその王陵として意義づけられている。このほか、陝川周辺の「多羅」、咸安周辺の

「安羅」、固城周辺の「小加耶」などがあったとされる。新羅は、慶州に都をおき、5世紀には数多くの王陵が築かれた。6世紀には版図を拡大して加耶諸国に攻め入る。

加耶地域は、地理的には最も日本列島に近い。靺鞨が早い段階の交易拠点で、弥生土器・庄内式土器・土師器などの土器をはじめ、筒形銅器・巴形銅器などのいわゆる「倭系遺物」の分布が濃密である。また、須恵器生産・鉄器生産や鉄素材の獲得、あるいは金工品を通じた交易など、この地域との交渉が、古墳文化に多大な影響を与えていることは言を俟たない。

7世紀の統一新羅時代まで、新羅と倭の関係は、外交関係としては決して緊密な関係にあったとはいえない。しかし、様々な分野でやはり多大な影響を与えている。ただし、いずれにあっても、都のあった中心地域を出自とする渡来系集団の存在は、今回の検討のなかでは確認することはできなかった。

日本列島在来の古墳は、基本的に墳丘を先行して構築したのち、埋葬施設をそののちにつくる「墳丘先行型」であるが、古墳時代中期の古墳で、ごくまれに墳丘後行型で埋葬施設を構築しているものがある。奈良県内では、奈良市円照寺墓山1・2号墳がそれで、あらかじめ石を敷きつめ、木棺をおいて粘土でそれを覆っていたという。

また、古墳の埋葬施設としての横穴式石室は、朝鮮半島から新しく導入されたものである。北部九州を經由して近畿地方に導入されたもの(北部九州型A類)もあるが、朝鮮半島からの渡来系集団が、近畿地方の群集墳などにおいてそれを採用したと考えられるものがある。

加耶・新羅系土器及び土製品については、安羅加耶(咸安)からの搬入品と考えられるものなど、加耶・新羅地域からの搬入品と加耶・新羅地域からの影響のもと、日本列島で生産されたものである。器種として、高坏・蓋・船形土器・動物形土器・四口連環壺・器台・台付壺・大甕・甑・長胴甕・平底鉢・羽釜・移動式竈と陶製算盤玉形紡錘車などがあり奈良県内で合計32遺跡から出土している。

また、鉄製品として、鑄造鉄斧・鉄鋌・板状鉄鉾・サルポ・鉄鐸・馬具・胡籙金具など金工品の一部について、新羅・加耶系の渡来集団と関連する遺跡・古墳を掲げた。

特定地域と結びつかないもの

ミニチュア炊飯具・釵子・穹窿頂天井横穴式石室、韓式系土器(複合型・在地型)、鍛冶工具・鉄滓、鉄製ミニチュア農具などは特定地域と関連づけることは今のところは難しいものの、明らかに渡来系集団と関連づけることのできる考古資料である。奈良県内の事例の分布を確認した。

出土遺跡の検討

出土遺跡の評価である。集落遺跡において

は、奈良盆地北部の沓分遺跡群での百済・馬韓、新羅・加耶渡来系集団が首長の麾下で周辺開発や生産活動を担っていた。奈良盆地東北部では、布留遺跡における豪族の「家産」にかかわった渡来系集団の活動、奈良盆地東南部では纏向遺跡における政権中枢部における渡来系集団の動向を確認するとともに、鉄器生産に介在した可能性を指摘した。奈良盆地中央部では、額田部東方地域の遺跡での渡来系集団の活動の痕跡を明らかにし、馬飼集団との関連についても指摘した。また同地域では、初瀬川・寺川の中下流部において周辺開発に従事した渡来系集団の動向を確認した。

奈良盆地西南部では、南郷遺跡群・名柄遺跡・脇田遺跡・土庫遺跡群・竹内遺跡における渡来系集団の動向を確認した。とりわけ、南郷遺跡群は、県下有数の韓式系土器出土地であり、豪族の「家産」を支えた百済、加耶、新羅系の渡来系集団が、盛んな活動をおこなってきたことが証明される。

奈良盆地南部では、東坊城・西新堂遺跡、内膳・北八木遺跡、山田道下層遺跡、高所寺遺跡、藤原京下層遺跡、檜前の周辺遺跡などにおいて生産活動・開発などに従事した渡来系集団の存在が確認できる。

このほか、五條盆地の集落遺跡、宇陀の集落遺跡でも百済・馬韓系の渡来集団が活動していたことを確認した。

古墳については、奈良盆地北部の大和6号墳、西北部の藤ノ木古墳、東北部の赤坂古墳群、石上・豊田古墳群・八三塚古墳、和爾古墳群、東南部の赤尾崩谷古墳群、外山大谷出土品、浅古、風呂坊、稻荷西2号墳、中央部の星塚1・2号墳、南部の南山4号墳、新沢千塚古墳群、貝吹山周辺の古墳、藤井イノラク古墳群、阿部山遺跡群、稲村山古墳、坂の山4号墳、上5号墳、西南部は室宮山古墳・掖上籬子塚古墳、大和二塚古墳、兵家古墳群、寺口和田古墳群、寺口忍海古墳群、石光山古墳群、巨勢山古墳群、寺口千塚古墳群、笛吹古墳群、山口千塚古墳群、小林榎ノ木古墳群、北窪古墳群、オイダ山古墳、五條盆地では五條猫塚古墳・勘定山古墳、宇陀地方では高山1号墳、岩清水スゲ谷古墳、石田1号墳、石柘榴垣内1号墳について、それぞれに認められる渡来系集団の出自と役割について検討した。

小結

以上、奈良盆地の様々な地域に出自をもつ古墳時代の多数の渡来系集団が多様な活動をおこなっていた痕跡を確認し、それぞれの遺跡を地域における位置づけをはかった。とりわけ、古墳時代における顕著な渡来系集団の活動には顕著なものが認められる。しかし、その出自と地域性からみて、それらはヤマト王権が一元的に獲得したのではなく、日本列島との関わりをもとめた朝鮮半島において政治的権力とは距離をおいた集団と、奈良

盆地の地域集団の利害が一致するなかで、その定着が実現したものであると考えられる。

(2) 5～6世紀の渡来系集団と朝鮮半島西南部の前方後円墳・埴輪

朝鮮半島にある12基の前方後円墳について検討をおこない、日本列島と深い関わりをもつ在地集団が築いたものであると考えた。

また、朝鮮半島の埴輪について、28遺跡の出土事例を検討し、～類に分類した。日本列島の影響のもと、在地集団が樹立したものであると考えた。

さらに、5～6世紀に朝鮮半島に出自をもつ渡来系集団や、朝鮮半島の埴輪生産が日本列島にも強い影響を与えていることを明らかにした。

この両者の交流には、海洋民の存在が重視される。

(3) 羽釜と移動式カマドの受容と展開

羽釜と移動式カマドから、朝鮮半島と日本列島の交流を明らかにし、生活様式・祭祀などに強い影響を及ぼしたことを明らかにした。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計3件)

坂 靖「古墳時代の遺跡構造と渡来系集団」『古代学研究』第199号 2013年 査読有 p9-16

中野咲「大和地域」『古代学研究』第199号 2013年 査読有 p33-42

坂 靖「遺跡からみたヤマト王権と鉄器生産」『たたら研究』53号 査読有 2014年 p53-62

〔図書〕(計1件)

坂 靖・中野咲『古墳時代の渡来系集団と出自と役割に関する考古学的研究』(課題番号24520880)研究成果報告書 2016年 p1-136

6. 研究組織

(1) 研究代表者

坂 靖 (BAN, Yasushi)

奈良県立橿原考古学研究所 附属博物館
学芸課長

研究者番号：30250377

(2) 研究分担者

中野咲 (NAKANO, Saki)

奈良県立橿原考古学研究所 調査課
主任研究員

研究者番号：00470279